

論 説

日本における菊栽培の伝統と菊細工

劉 洋

はじめに

第一章 日本における菊植栽の伝統

第二章 近世民衆による菊の栽培と観賞

終 章 日本における菊栽培の系譜

はじめに

今日の日本で、春の花見に対する秋の風物詩としては、各地の名所旧跡で開催されている菊まつりが挙げられる。多種多様に品種改良された園芸菊と大河ドラマなどをテーマに造られた菊人形が、訪れた観賞客を楽しませている。

菊はこれまで、桜とともに日本の国花として認識されてきた。日本人は長い間、農業を主な生業として営んできた。春、田植えの時期に咲く桜は、古くから農耕儀礼と絡み合い、稲の豊作を占う行事として重視されてきた。また奈良時代の貴族にもっとも愛好されていた梅に代わって、平安時代には桜の美しさを表現した和歌が多く見られるようになり、桜の花見は平安貴族の重要な行事となった。

このように桜は古くから日本で重要視された。山田孝雄著『櫻史』をはじめ、斎藤正二著『日本人とサクラ』や白幡洋三郎著『花見と桜』など、桜論や花見論に関する研究が積み重ねられている。一方、自生種の春の桜と違って、秋の菊はもともと日本に存在せず、おそらく9世紀初頭に中国から伝わってきた植物である。

中国では、寒気に耐えて、凛々しく咲く菊の花が、不老長寿をもたらす仙薬と思われてきた。さらに霜に傲り、咲き誇る菊花が、屈原や陶淵明などの文化人にも好まれた。剛直で、高潔な彼らの生き方の象徴として、菊は梅、蘭、竹とともに、君子たる花と評されている。

菊が日本に渡来したと思われる9世紀初頭の頃において、中国の制度と文化は、当時の日本と比べると、先進的なものであったといえよう。それゆえ積極的に中国の文化を受容する当時の貴族た

ちは、長寿の花・君子たる花の文化要素を有する菊を受け入れ、これを愛好した。菊は渡来後、平安時代初期に相次いで編纂された勅撰漢詩集をはじめ、勅撰和歌集などの貴族文学に歌われていた。また長寿をもたらすとされる菊の呪術性にちなんで、菊酒や菊の着せ綿などが、重陽の節会に用いられていた。さらに菊をモチーフする文様は、瑞祥紋として衣装などに使用されてきた。

この過程において、平安時代中後期頃から、中国的な菊の価値観に対し、菊を百草の王、花の中の貴種と見なす日本独特の考え方が生まれ、新しい菊のイメージが創成されたと考えられる。そして、その後にデザイン化された菊紋が天皇家の紋章として使用され、権威を象徴するようになったと考えられる¹。

近世になると、社会の安定と経済の繁栄によって、もともと上流社会にしか享受できない文化が民衆に広がりを見せた。植木屋を中心に、菊に対する品種改良が大に行われ、庶民に支えられた園芸ブームが空前となった。そして、中国に代わって先進的な園芸センターとなった日本を訪れたヨーロッパのプラントハンターたちは、菊を含め、多くの植物を広く欧米に伝えていった。

このように、古代から現代まで、日本から世界へ、そして貴族から庶民まで、菊は日本の社会、歴史そして文化のなかに、さまざまな痕跡を残しているといえよう。

花という観点から日本文化を考える時、桜がすでに文学、民俗学などの諸分野において、厚い研究蓄積を積み重ねてきた。しかし雑種性の強いとされる日本文化を考察には、桜一辺倒の研究だけでは決して十分とは言えない。むしろ日本の歴史および社会において、受容と変容のプロセスを遂げた菊についての多面的追究は、重要な問題であると考えられる。しかし残念ながら、これだけ長く日本で賞翫されてきた菊に対して、文学、歴史、民俗学などの諸分野を含めた文化史的な視点からの総合研究が非常に乏しい。

むろん9世紀初頭から現代に至るまでの、日本人と菊のかかわりについては、とても小稿で語りきれものではない。そこで小稿では、研究対象を園芸植物としての菊に、焦点を絞りたい。これまで、日本における菊の栽培とその観賞については、近世園芸文化を中心に扱われてきた。しかし小稿では、19世紀の園芸ブーム以前における菊についても注目したい。それゆえ伝来当時から近世まで、そして今日にも受け継がれている菊の栽培・観賞の系譜を、古代の詩歌や中世の記録、さらには近世の園芸史料などを中心に追究していきたい。

第一章 日本における菊植栽の伝統

毎年秋になると、北海道から九州にかけて、日本各地で菊まつりが開催され、訪れた人々を楽しませている。今日私たちが観賞する園芸菊は、江戸時代の園芸ブームを背景に、盛んに行われた品種改良の結果、生まれたものである。しかし、近世の園芸菊ブームは、突如として出現したものである。そこに至るまでには、脈々と平安時代から伝わってきた菊栽培の伝統と技術があった。

まず、菊が日本に渡来したと思われる平安時代初期の桓武朝から嵯峨朝にかけては、中国の学

1 菊の貴種性・権威の象徴という性格と紋章としての菊については、別稿「菊の紋章化と後鳥羽上皇」を準備しているので、それに譲りたい。

問・儀礼などが重んじられていた。とくに嵯峨天皇・淳和天皇の頃には、文学が栄えることは、国家経営の大業につながると考えられていた。こうした文章経国思想に基づき、『凌雲集』をはじめ、『文華秀麗集』、『経国集』といった3つの勅撰漢詩集が相次いで編纂された。

これらの漢詩集では、菊が12首に詠じられている。そして「重陽節神泉苑賜宴群臣」や「重陽節菊花賦」のように、すべて重陽節の際に吟詠された作品であることが特徴となっている。菊が老いを払って長寿をもたらす花という中国の考えをうけ、重陽の節会に菊を重要視していた平安貴族の姿勢が窺える。おそらく重陽儀礼の受容を契機として、菊が日本にもたらされていた可能性が考えられる。

そして作品の内容から、当時においては、白菊と黄菊が栽培・観賞されていた様子が見受けられる。たとえば『凌雲集』に見える嵯峨天皇作「九月九日於神泉苑宴群臣」には「摘入金杯辨色難」とある²。菊を摘んで金色の盃に浮かべさせたら、その色がわからなくなったという内容から、金色の盃と同色の黄菊を、酒に浮かべることには大きな意味があったように思われる。また『経国集』に収録された嵯峨上皇作「重陽節菊花賦」には「于時衆芳彫寒菊咲。或素或黄。満庭芬馥」と見え³、晩秋に、白あるいは黄色の菊が咲き誇り、馥郁な香りが庭園に漂っている景色が窺える。これらの作品を通して、晩秋に芳しい菊の香りを楽しみながら、咲き誇る菊を賞翫した貴族の様子が想像できる。

唐風文化を積極的に受容し、勅撰漢詩集が相次いで編纂された後、安定的な国際情勢のなかで、長い間にわたって、摂取されてきた唐の文化を消化、吸収し、これを日本の在来文化と融合させていくというプロセスから、和歌を中心とする国風文化が生まれた。

延喜5年(905)に成立の最初の勅撰和歌集『古今和歌集』には、前栽として庭に植えた菊を歌う和歌が見受けられる。たとえば268番の在原業平作「人の前栽に菊に結びつけて植ゑけるうた」は、ある人の庭に、菊を前栽として植えてもらうために贈った際に詠じた作品である⁴。ほかに280番の紀貫之が、よその家にあった菊の花を移植した時に詠んだ歌では、「咲きそめし屋戸しかはれば菊の花色さへにこそ移ろひにけれ」として、最初に菊が咲いた家から新しいに家に移ったら、菊の花の色までがうつろったと詠じている⁵。当時の貴族が時間の経つにつれて、移ろった菊の美しさを賞美している様子が窺われる。

さらに摂関政治期になると、女性によって書かれた日記からは、当時貴族の生活に定着していた菊の様子が窺える。たとえば平安時代中期の『紫式部日記』寛弘5年(1008)10月条では、「行幸近くなりぬとて、殿のうちを、いよいよつくりみがかせたまふ。よにおもしろき菊の根を、たづね

2 『凌雲集』（『日本文学大系』第24巻に所収、国民図書株式会社編、集国民図書株式会社、1927年、P.103）

3 『経国集』（『日本文学大系』第24巻に所収、国民図書株式会社編、集国民図書株式会社、1927年、P.241）

4 『新編日本古典文学全集 古今和歌集』小沢正夫ほか校注・訳、小学館、1994年、P.122

5 前掲4と同じ、P.127

つつ掘りてまゐる。」と記している⁶。一条天皇の行幸を迎えるために、藤原道長の土御門邸では、一段と入念な手入れがなされた。整備された庭に、あちこちから集めてきた各種の美しい菊が栽培されていた情景が想像される。

そして時代がさがり、室町初期の応永7年（1400）、菊亭家とも呼ばれた今出川家の人々と伏見宮貞成親王（1372-1456）によって編纂された私家集の『菊葉和歌集』には、庭に植えている菊の美しさを詠じる和歌が見える。たとえば、その696番「此宿に千世を契りて瑞がきの久しく匂ふ庭のしら菊」⁷や756番「うつろはで久しく匂え庭の菊、秋はくるとも花の形見に」⁸では、庭にある菊の香りが主題となっているが、「庭のしら菊」そして「花の形見」といった表現を通じて、菊の花としての美しさにも注目されていたことがわかる。

また今出川家は菊亭家とも呼ばれていた。林鶯峯編纂の江戸前期の史書『続本朝通鑑』では、今出川家の祖とされる鎌倉・南北朝時代の公卿・今出川兼季について、延元3年（1338）12月条には「兼季愛菊植於庭、故今出川有菊庭別号、後改庭為亭」と記している⁹。つまり、今出川家の祖である兼季が菊を愛好し、庭に菊を栽培しているから、今出川はまた菊庭の別号をもち、その後「庭」を「亭」に改めたとの記述が見える。

しかし安永6年（1777）から寛政10年（1798）にかけての成立と思われる柳原紀光編の『続史愚抄』では、花園天皇延慶元年（1308）11月2日条に「院。永福門院。新院等御同車幸菊亭西園寺大納言公顕第也」と見える¹⁰。つまり、ここでいう菊亭は、今出川兼季の実の兄である西園寺公顕の邸宅であることがわかる。公顕は元応3年（1321）に亡くなっているため、そのあとを継ぐ兼季が菊亭を領有することとなったと考えられる。

さらに遡ると、同書文永2年（1265）10月17日条には、「一院渡御菊第入道前太政大臣實氏第撰集春部二卷續古今集未奏覽已前也」と記されている¹¹。これによって、『続古今和歌集』の下命者である後嵯峨院が、『続古今和歌集』春の部の編纂事情により、西園寺実氏の邸宅・菊第に幸行したことがわかる。

川上貢の『日本中世住宅の研究』は、菊亭が西園寺実氏の邸宅であるとするこの記録が、菊亭の初見であると指摘するとともに、菊亭は西園寺今出川殿に匹敵する邸宅であったとしている¹²。

西園寺実氏は、西園寺公顕と今出川兼季の曾祖父にあたる人物であり、今出川兼季が菊を愛好したことが菊亭の由来とする訳にはいかない。むしろ菊亭も西園寺家領の邸宅の一つの名称であるか

6 『紫式部日記』（『新編日本古典文学全集和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』に所収、藤岡忠美ほか校注・訳、小学館、1994年、P.151）

7 『菊葉和歌集』（『新編国歌大観 第6巻 私撰集編Ⅱ・歌集』に所収、「新編国歌大観」編集委員会編、角川書店、1988年、P.389）

8 前掲7と同じ、P.391

9 『本朝通鑑第11』林鶯峯撰、国書刊行会、1919年、P.3791

10 『国史大系 第13巻 続史愚抄 前篇』黒板勝美編、吉川弘文館、1966年、P.393

11 前掲10と同じ、P.36

12 『新訂日本中世住宅の研究』、川上貢著、中央公論美術出版、2002年

ら、兼季がその邸宅を受け継いだために、兼季を祖とする今出川家が菊亭の別号をもつようになったと考えるべきだろう。

横井清著『室町時代の一皇族の生涯—『看聞日記』の世界』は、「兼季という人、無類の菊好きであって、邸内の庭を菊花でうずめ、世に「菊亭」の異名をとったくらいで、子孫代々「菊亭」を通称としたのであった」と述べている¹³。菊亭の由来が、兼季の菊愛好によるものではないことは先に見た通りであるが、横井の「兼季という人、無類の菊好きであった」という指摘は否定できない¹⁴。なぜなら平安時代から、前栽として菊を庭に植え、菊をめぐる趣味が、一種の伝統として、鎌倉時代末期の貴族にも継承されていたと思われるからである。兼季のみならず、秋になると、当時の貴族の庭に菊の姿が見えるという風景は否定できない。

また、貴族のほかに、寺院でも菊が栽培されていた。室町中期、京都相国寺鹿苑院内の蔭涼軒主が記録した公用日記『蔭涼軒日録』のうち、季瓊真薬によって書かれた寛正4年（1463）9月26日条には、春溪和尚の今是庵の様子について「開小徑栽雜菊数百莖。為墻垣雜花盛開為觀也。」と記されている¹⁵。この記録によって、今是庵の小道に、さまざまな菊を数百株ほど植えて垣にしたことがわかる。そして菊が咲き誇る時期になると、観るに値する素晴らしい景色であったという記述に注目すべきだろう。

また同書文明17年（1485）5月1日条には、「午後黄菊数莖献西府」や「夏菊数莖」などの記述が見える¹⁶。ふつう、菊は晩秋・初冬に咲く植物である。5月の日記に、黄菊及び夏菊に関する記録が窺えることは、当時すでに品種改良がおこなわれ、早咲きの菊が作られていた可能性も考えられる。

今日、秋の風物詩として菊を観賞する現代人と変わらず、平安時代から室町時代にまで、貴族や僧侶たちも、菊を庭に植えて、その香りと時間の経つにつれて変色する菊の姿を楽しんでいたものと思われる。このような貴族の園芸文化を背景に、長年培ってきた菊栽培の技術と観賞の伝統が、近世園芸文化に開花した菊ブームの礎となったと考えられる。

第二章 近世民衆による菊の栽培と観賞

近世社会では、社会が安定し経済も繁栄を呈していた。それゆえ出版文化の活発化によって、カネさえあれば、誰でも文化を享受し、誰でも技術を手に入れることができるような時代となった。そうした社会状況のなかで、園芸文化の伝統をひく上方において、そして新生大都市である江戸において、さらに地方において、菊がどのような形で、著しい発展を遂げたかを、本章で確認しておきたい。

13 『室町時代の一皇族の生涯—『看聞日記』の世界』横井清著、講談社、2002年、P.29

14 前掲13と同じ

15 『蔭涼軒日録 巻1』玉村竹二ほか校訂編集、史籍刊行会、1953年、P.428

16 前掲15と同じ、P.200

第一節 寺院を仲介とする上方の菊会

日本における園芸書の成立は17世紀後半に遡る。寛文4年(1664)の成稿で、延宝9年(1681)に、水野元勝によって刊行された『花壇綱目』が、その最初のものとして位置づけられる。同書では、福寿草からはじめ、つつじ、菊、椿、牡丹など、当時人気のある花卉が184種類とり上げられており、その性状や栽培方法などが記されている¹⁷。

著者の水野元勝の経歴については詳しくわからないが、君塚仁彦が「近世園芸文化の発展—その背景と担い手たち」では、「著者の水野元勝は大阪の住人であるが、『花壇綱目』刊行の背景には、上方における園芸文化の伝統と商業都市大坂の繁栄とがあったものと考えられる」と指摘している¹⁸。

君塚の推定通り、すでに第一章で述べたように、菊をはじめ、草木花卉を庭園に植栽し、それを賞翫する伝統は、すでに上流社会に定着していた。当時の新生都市であった江戸に比べて、古代・中世以来の園芸文化の伝統をひく上方のほうが、先に民衆には広がり易かったと考えられる。

菊に関して見れば、正徳から享保年間(1711-36)にかけて、京都では、菊の栽培方法などを記す専門誌が多数刊行されている。たとえば、正徳3年(1713)の序文をもつ霽月堂文竹著の『当世後の花』が¹⁹、同年に刊行されたほか、正徳4年(1714)の序文をもつ志水閑事の『花壇養菊集』も翌年に発行されている²⁰。これらの専門誌では、当時に人気のあった菊の花形を紹介しているほか、一年を通じた菊の栽培、移植方法、栽培具などが詳細に記されている。そしてこれらの専門誌を集大成する意図で書かれたものが、養寿軒雲峰の『花壇菊花大全』であった。享保2年(1717)の跋をもつ本書は、3巻に分けて、花壇作り、培養土の配合、菊栽培の方法、移植方法、花形、花色などについて、従来の説を取り入れながら、当時における栽培の方法などを記している²¹。

また当時京都で菊の品評会が非常に流行していたことをうけ、本書巻上の冒頭では「菊会の初りの事」という一節が設けられている。養寿軒雲峰は、歌合わせのように左右に分けて、菊花の優劣を競う平安時代の菊合を挙げたあと、「去ル元禄の比かとよ、京寺町四条の道場、元湘院におみて、絹屋半三郎、伊勢屋喜兵衛、竹屋彦兵衛、中略など七、八人」と述べている²²。この記述によって、菊をもちよって展示する上方の菊品評会は、元禄年間(1688-1703)から始まっていたことが窺われる。

17 『花壇綱目』水野元勝著、松井頼母増補、河内屋太助出版、国会図書館蔵、函架番号197-245

18 君塚仁彦「近世園芸文化の発展—その背景と担い手たち」(『日本農書全集54 花壇地錦抄』に所収、君塚仁彦校注・執筆、農山漁村文化協会、1995年、P.9)

19 『当世後の花』霽月堂文竹著、谷口七左衛門出版、1713年、国会図書館伊藤文庫蔵、函架番号・特7-457

20 『花壇養菊集』志水閑事著、上村四郎兵衛ほか出版、1715年、国会図書館白井文庫蔵、函架番号・特1-2863

21 『花壇菊花大全』養寿軒雲峰著(『日本庶民文化史料集成 第9巻 遊び』藝能史研究会編、三一書房、1974年に所収)

22 前掲21と同じ、P.492

次に「いせ喜が尺八にて、竹彦か一ふしを肴に酒事にして日をくらし」という記述も見える²³。つまり菊を持ち寄って、それぞれの菊花を楽しむ以外、音楽や料理を楽しむ様子も窺える。元禄期において、豊かになった新興の町人たちが、豪華な本膳料理を楽しむようになったという原田信男の指摘もある²⁴。つまり、初期の菊の品評会は、かなり小規模なもので、菊の栽培技術自体を競い合うだけではなく、料理も含めて、経済力のある新興町人たちの楽しみとして行われた催しと考えられる。

さらに「双林寺の閑阿弥にて会有し」や「丸山正阿弥亭にて会あり」などの記述も見える²⁵。元禄期以降、上方の菊会が丸山也阿弥・連阿弥・正阿弥のほか、双林寺閑阿弥、北野などでも盛んに行われていた様子が窺われる。

享保2年、丸山也阿弥で143人が参加し合計380種の菊を展示した菊会を記録したのは、『丸山菊大会』である。これについての解説では、北村四郎が正徳5年(1715)から享保2年(1717)まで行われた菊会の一部を挙げている。これだけでも、3年の間に計12の菊会が行われていたことが分かる。また参加人数と展示花数を見れば、30人から143人まで、規模はそれぞれであるが、平均で1人2種類以上の菊を展示していたことが判明する²⁶。さらに『丸山菊大会』では、「山崎旭翁堂」、「宇治寿遷軒」、「伏見松屋源右衛門」、「八幡小泉氏」、「江洲野洲閑笑堂」などのように²⁷、参加者が京都だけでなく、山崎、宇治、滋賀県の野洲からも参加していたことがわかる。

元禄期の菊会と比べると、正徳・享保頃の菊会には、料理を楽しむ要素が見えなくなるとともに、参加人数、展示する菊の種類が非常に多くなり、菊の人気が高まっていた様子が窺える。その性格も豊かな町人たちが園芸や料理を楽しむというより、菊の栽培技術を競いあう専門性が見受けられる。

また元禄期から享保にかけて、すべての菊会は、寺院で開催されていたという共通点が見られる。たとえば『丸山菊大会』が記録したのは安養寺多福庵(也阿弥)で開催されたものである。也阿弥というのは、京都東山区に位置する安養寺の中にある六阿弥坊の一つである。也阿弥のほか、勝興庵正阿弥、延寿庵連阿弥などもあるが、現在京都円山公園内に長寿院左阿弥が料亭として現存している。

「阿弥」号をもつこれらの時宗の寺院については、元禄期頃から料理屋を営むなど、裕福な人々の集団娯楽の場として、利用されていたことが、江馬務によって指摘されている²⁸。

つまり、園芸文化や料理文化のような、もともと一部の上流社会の人々に握られていたハイカル

23 前掲21と同じ、P.492

24 『和食と日本文化—日本料理の社会史』原田信男著、小学館、2005年

25 前掲21と同じ

26 北村四郎「丸山菊大会」解題(『日本庶民文化史料集成 第9巻 遊び 丸山菊大会』藝能史研究会編、三一書房、1974年に所収)

27 『丸山菊大会』(『日本庶民文化史料集成 第9巻 遊び』藝能史研究会編、三一書房、1974年に所収)

28 江馬務「喫茶と茶店、茶屋、料理屋のはなし」『茶道雑誌』32-9河原書店(『江馬務著作集5』に所収、中央公論社、1976年)

チャが、裕福な町人層にも広がりを見せていく過程において、多くの人々のつどいの空間として、寺院が利用されていたと考えられる。上方の菊の品評会がすべて寺院で行われた点からも、寺院が一つの仲介として、菊栽培技術の向上と園芸菊ブームを推進する役割を果たしたと思われる。

品評会が盛んに行われた結果、菊の栽培が大流行した。それぞれの努力によって育成されてきた新苗を紹介するために、植木屋が菊の花形、色そして値段を記した販売カタログを出版するようになった。たとえば享保8年（1723）、大坂の樹木屋治兵衛などによって、刊行されたのは、『新菊苗割代附帳』である。このなかで全114種の菊が紹介されて、「北極山」という品種が3両2分の値段がつけられていたことが分かる²⁹。

菊の品評会が盛んに行われた結果、近世上方においては、菊栽培が個人の楽しみから、新しい苗の取引を伴う植木屋のビジネス活動へと転換していったことが窺われる。そしてこうした活動が盛んとなったのは、やはり菊が幅広く人々に愛好されていたことの結果と考えてよいだろう。

第二節 武家を媒介とする江戸の園芸

一方、江戸においては、元禄8年（1695）、江戸第一の植木屋伊藤伊兵衛によって書かれた『花壇地錦抄』が刊行された。『花壇綱目』の内容をはるかに凌駕した本書では、250種あまりの菊が紹介されている。

著者の伊藤伊兵衛三之丞について、享保4年（1719）の序文をもつ辻雪洞著『東都紀行』には、「其初めは、藤堂大学頭高久の露よけの男成しに、大学頭、草花の類当座に移し持たせ、花過ぎれば悉くぬき捨させけるをば、此伊兵衛植ためけるより、次第次第に、きり島つつじ、百椿、牡丹、芍薬<略>などなど、すけばあつまる所成べし」という記述が見える³⁰。

これによれば、伊兵衛はもともと藤堂藩の屋敷で庭掃除などをする下男のようなもので、津藩の屋敷で園芸技術を身につけたことになる。そして屋敷で季節過ぎた草花を徐々に集めた結果、伊兵衛が江戸一の植木屋に成長したことがわかる。

すなわち君塚仁彦が『日本農書全集 花壇地錦抄』の解題で指摘したように、江戸第一の植木屋伊兵衛にとって、藤堂家屋敷の存在は極めて重要で、おそらく藩邸で上方植木職人たちの技術を見おぼえ、自らのものにしていったのだろう³¹。即ち、江戸第一の植木屋伊兵衛の知識体系の源流は、津藩という上方大名家のものであったと考えられる。

また新生都市である江戸が、後に世界でも屈指の園芸センターに発展していったのは、徳川将軍や諸大名たちの園芸趣味と「参勤交代」というシステムに関連するものと思われる。

29 『新菊苗割代附帳』大坂樹木屋治兵衛ほか出版、1723年、国会図書館白井文庫蔵、函架番号・特1-2508

30 『東都紀行』辻雪洞著（『新燕石十種 第3巻』朝倉治彦ほか監修、中央公論社、1981年に所収、P.267）

31 君塚仁彦「近世園芸文化の発展—その背景と担い手たち」（『日本農書全集54 花壇地錦抄』、君塚仁彦校注・執筆、農山漁村文化協会、1995年に所収）

貴族の生活様式を受け継いで築き上げた武家文化のなかにも、園芸趣味が見受けられる。たとえば、徳川二代将軍・秀忠の花好きについて、作者不詳で、寛政4年（1792）に常政なる人物が書写した『額波集』には、牡丹と珍しい椿を献上された秀忠は、それをことのほか賞翫したという旨の記述が見える³²。

こうしたことを承けて、『徳川實紀』『台徳院殿御實紀附録卷五』は、「秀忠愛花卉」と題し、「花卉を殊に愛翫し給ひしゆへ、各国より種々の珍品ども奉りける内に、廣島しぼりといふ花卉に斑の入たる椿を、中略、後園にうへしめられ、いつしか咲出んと月日をかぞへて待しめ給ひ。」と記し、徳川秀忠が各国の大名より献上された珍しい花卉を賞翫し、特に広島しぼりという品種の椿が好きであったようで、その開花を楽しみにしていた様子が窺える³³。

このような將軍家の園芸趣味が、諸大名や御家人などに影響を与えた可能性は否定できない。江戸で建設された諸大名の屋敷には、庭園が造営され、多くの庭師や植木職人が江戸に集められて、庭づくりに、その腕前を發揮したものと思われる。同時に、江戸庶民に園芸知識を伝えるという役割も果たした。先に述べた江戸第一の植木屋伊藤伊兵衛は、まさに大名藩邸で園芸知識を身につけた一人である。

また寛永12年（1635）徳川幕府が「武家諸法度」の寛永令を頒布した。そのなかで大名には国元と江戸とを一年交代で往復する参勤交代を義務づけられた。これによって、全国各地から種類さまざまな花卉を江戸にもたされ、諸大名の庭に栽培されていたと思われる。また、珍しい品種を將軍に献上し、贈答品としても使われていたことも考えられる。

近世後期、江戸が世界有数の園芸センターにまで成長したのは、植木屋の努力と庶民の支えが大きな要因となったが、園芸知識を民衆に広げ、珍しい植物が江戸に集められる状況にまで至らせたという点においては、武家の果たした役割を否定できないと思われる。

上流社会の園芸文化が、民衆へと広がっていく過程において、上方では寺院が、人々が集まり花を楽しむ空間を提供するという仲介の役割を果たしたことについては、すでに前節で述べた通りである。これに対して江戸では、その園芸文化の開花に、幕府や諸大名などの武家が媒介としての役割を果たしたと考えられる。

第三節 日本独特の観賞法—菊細工・菊人形

正徳から京都で流行していた菊の品評会は、江戸にも影響を与えた。享保3年（1718）から江戸でも菊会が開催されるようになり、「江戸菊会」として広がりを見せた。園芸菊にさらなる改良を施した結果、一層手の込んだ菊細工も現れるようになった。

菊をもって、人物、動物、風景を造形する菊の作り物、つまり菊細工は、日本独特の鑑賞法にはかならない。現代菊人形の母体である菊細工は、近世の史料では、「造り菊」、「菊の造り物」などと記されている。

32 『額波集』国立公文書館所蔵、函架番号・170-0195

33 『国史大系 徳川實紀第2編』黒板勝美編 吉川弘文館、1930年、P.294

その起源時期については、文化初年（1804）と文化8年（1811）とに、説が分かれている。これについては定かではないが、諸史料を総合してみると、おそらく19世紀初期にはすでに出現していたものと思われる。

まず江戸の風俗の変遷を記録した小川顕道著『塵塚談』には、「巢鴨村植木屋菊の事」が見える。著者の顕道は、小石川養生所に勤める人で、文化11年に成立した本書では、巢鴨の菊について「文化初年の頃より、大造りといふ事始り」と記している³⁴。これによって江戸の菊細工が、文化初年の巢鴨で造られていたことがわかる。次に、当時の菊細工について、本書は「一本の菊花にて、富士山、屋根船、島台、帆かけ船、二見ヶ浦、岩に牡丹、獅子の類、其外種々の物を作れり、誠に樹芸の奇工を極む」と評している³⁵。こうして文化初年の巢鴨では、富士山などの風景、獅子のような珍獣、屋形船などが、一本の菊で精巧に造られる菊細工が行われていたことが見受けられる。

一方、『塵塚談』の説とは異なり、江戸小日向本法寺の住職である十方庵敬順によって書かれた『遊歴雑記』では、菊細工が文化8年、9年に始まったと述べている。文政12年（1829）に完稿した本書では、「巢鴨通り形造り菊花の評」をテーマに、「文化八九年の頃より形造りといふことを家々に専らとす。その作り方は白菊のみをあつめ富士山に造りたるあり、又は黄菊のみを以て虎の形に作り」と記している³⁶。文化8年（1811）から、巢鴨では、人々が菊細工造りに力を入れていることが読み取れるほか、当時、白菊を集め、富士山を造る、あるいは黄色い菊で虎を造るなど、菊細工の内容も窺える。

『塵塚談』と『遊歴雑記』では、菊細工の始まりが少し異なるが、菊細工のテーマとして取り上げられていたのは、景観、動物などの類であったことは共通する。

ところが、巢鴨で流行した菊細工が一度廃れてしまったことが、齊藤月岑著の『武江年表』によって確認できる。本書文化9年（1812）9月条には「九月、巢鴨染井の植木屋にて、菊の花を以て人物鳥獸何くれとなく、色々の形を造りて諸人に見する。（中略）文化十三年迄ありしが、夫より後造物は止みたり」とある³⁷。この記述から、文化9年には、巢鴨そして染井の植木屋で、人物鳥獸をモチーフに、菊細工が造られていたが、その後の文化13（1816）年になると、菊細工が一旦廃れてしまうことが読み取れる。

下火となった原因については、『塵塚談』をはじめ、それぞれの書物ではまったく触れておらず、不明とするほかはない。しかし江戸住民を魅了した菊細工は、ここまま衰退してしまっただけではない。『武江年表』弘化元年（1844）10月条は、「十月より、巢鴨染井菊の造り物再びはじまる。文化よりこのかた花壇のみにて造り物は絶えたりしが、今年巢鴨なる靈感院の会式の飾り物とて、宗祖の御難のさま、蒙古退治の体など、菊花に造りしより始まり、植木や毎に菊の造り物をなして諸

34 『塵塚談』小川顕道著（『燕石十種 第1巻』朝倉治彦ほか監修、中央公論社、1979年に所収、P.295）

35 前掲34と同じ

36 『遊歴雑記』二編の上・27（『江戸叢書 巻の四』江戸叢書刊行会編、日本図書センター、1980年に所収、P.59）

37 『増訂武江年表2』金子光晴校訂、平凡社、1968年、P.46

人に見せける」と述べている³⁸。

このように、一度江戸住民の娯楽となった菊細工は、弘化元年巢鴨靈感院の会式の飾り物をきっかけに、再開されたことがわかる。この時に造られた日蓮上人の細工物は、今日の生人形で造られた菊人形とは異なるものであろうが、おそらく現代菊人形の始まりではないかと思われる。また一度目の流行では、景物、動物などが主流であったに対して、二回目の流行においては、「宗祖の御難のさま」、「蒙古退治」のような、歴史の一場面を再現する作品が登場し、菊細工を通して、そのストーリーを観客に楽しんでもらう趣旨が見受けられるようになっている。

もともと菊造りの中心は巢鴨であったが、『遊歴雑記』の「巢鴨通り形造り菊花の評」では、「猶此外大塚、雑司屋、高田辺の植木屋ども、思ひ／＼に菊の作りものを拵へしまゝ百軒に余りて、一日には中々見尽しがたく」と述べており、巢鴨のほか、大塚、雑司ヶ谷、高田にまで拡大していたことがわかる³⁹。また『武江年表』の弘化元年条でも「植木や毎に菊の造り物をなして諸人に見せける。翌巳年よりは白山駒込根津谷中に至る迄、植木屋ならぬ家までも競ひて造りしかば、凡そ六十余軒に及べり」と述べている⁴⁰。これらの記述によって、巢鴨（豊島区）のほか、白山・駒込・根津（文京区）の植木屋も加わり、規模を拡大して再開されていたことになる。

一度廃れてしまったこともあるが、菊細工の人気ぶりは少しも変わっていないと考えられる。たとえば、文化年間の菊細工を記録『塵塚談』では、「文化十年癸酉に、三十五軒にて造る、村中にて、百姓、商人も交り造れり、これが為に、遊観の人、東は鶏声ヶ窪、西は大塚より往来、群集市をなせり、酒食の店数百軒出来、巢鴨村開けしよりの繁栄、一村の潤となれり」と述べている⁴¹。このように、巢鴨では、植木屋だけではなく、多くの人々が菊の品種改良と菊の細工物に携わっていた。園芸菊、そして人工的に造られた菊細工で、多くの見物客を楽しませたと同時に、村も裕福となったことがわかる。また弘化年間の菊細工を記録した『武江年表』では、「江戸中の貴賤、日毎に群集して見物しければ、年毎に盛になり」と述べられており⁴²、江戸中の人々が皆こぞって菊細工を見物する賑やかな、騒々しい様子が窺える。

すでに正徳・享保年間には、菊栽培が新しい苗の取引を伴うようになり、上方植木屋のビジネスと転じたと同様、菊細工も商売と絡みあっていたと考えられる。文政10年（1827）年に刊行された岡山鳥著の『江戸名所花暦』には、菊の名所として挙げられた雑司ヶ谷の様子について、「鬼子母神の境内、貨食屋の奥庭、あるいは茶店、みなよく菊を養ひ造りて、十月八日より会式なれば、その参詣の群集をまつなり。六老僧の寺院にも、おなじ時、境内または庭中へ菊を植え、日覆・障子をかけて渡して、手際のほどをみするもあり」と記されている⁴³。このように、菊細工が寺院、料

38 前掲37と同じ、P.104

39 前掲36と同じ

40 前掲37と同じ

41 前掲34と同じ

42 前掲37と同じ

43 『新訂江戸名所花暦』鈴木健一ほか校訂、筑摩書房、2001年、P.164

理屋、茶屋などの庭に飾られ、ある種の遊興性を演ずることによって、人々を引き寄せる装置となり、寺院・飲食店の雰囲気盛り上げていたと考えられる。

以上で見たように、文化・文政年間に巣鴨で始まった菊細工は、弘化年間になると、いっそう地域を拡大して再興されていた。寺院、料理屋などの庭に置かれており、人々を引き寄せる装置として商売にも利用されていたことが窺える。そして嘉永年間（1848-54）以降、幕末明治初年には、生人形師たちが、菊人形の製作にかかわり始めたと思われる。また菊人形という呼び方も、明治時代から定着し始めたものだろう。生人形と菊細工の融合で造られた今日のような菊人形は、団子坂を中心として流行し始めたものと思われる。

文化年間から現れた菊細工は、物語や芝居のストーリーを楽しむことで、庶民の娯楽として繁栄を呈した。菊で等身大の人形を作り、物語や劇の一場面を作ってみせるという発想は、日本独特のものであるが、日本文化の中で、必ず異質的なものではないと思われる。

なぜなら町田香の「近世庭園の遊び方—劇場と化す都市の庭園」は、すでに近世初期の宮廷貴族そして大名たちの庭園で、わざと等身大の人形を置いて、このような演出、装飾を通じて、演劇的な遊興を楽しむやり方が、見受けられたことを指摘している⁴⁴。

たとえば、町田の論文で引かれた常子内親王の日記「無上法院殿御日記」貞享4年（1687）年8月11日条では、明正院の庭園について「御庭の桜の木につくり花をつけられ、さてさて時分のやうにさき、中略、又御茶屋などにも、うつくしきもてあそびものともかさられ、老人をつくり、そのぬしのやうにして有」という記述が見える⁴⁵。

近世初期の貴族庭園では、暦の八月にもかかわらず、庭の桜の木に造花をつけ、満開した春の景色を演出していた。また建てられた茶屋のところに、わざとお年寄りの人形を置いていた。老人に店主の役を演じさせたことが、この記述からわかる。思うままに外では自由に行動できない貴族が、造花やお年寄りの人形といった道具を通じて、庭をわざと芝居の舞台と化した。親しまれていた自分の庭園に、これらの遊興的な要素を盛り込んで、普段味わえない生活を楽しむ趣向が窺える。

これまで見てきたように、菊を集め、造った富士山の菊細工が、なかなか富士参りに行けない女と子供を楽しませたり、日蓮上人受難や蒙古退治の菊細工を通して、人々にその歴史的なストーリーを味わったり、象や獅子など日本にいない珍獣を造って、人々を驚かせたりしていた。つまり、非自然的な菊細工によって、日常と違う「ハレ」の場面が創造されたのである。『武江年表』をはじめ、江戸の随筆に記されたような菊細工を楽しむ群集の情景こそが、演劇の一場面として菊細工を楽しむ江戸庶民の姿といえよう。

貴族にしても、庶民にしても、人間が自ら造りだした非日常の空間を楽しむという点においては、江戸庶民の娯楽の一つである菊細工と、庭に人形を置いて劇場と化す貴族の庭園に、同様の趣

44 町田香「近世庭園の遊び方—劇場と化す都市の庭園」（『都市歴史博覧—都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ』白幡洋三郎ほか編、笠間書院、2011年に所収）

45 前掲44と同じ、P.367

向を読み取ることができよう。

第四節 地方武士による修養目的の菊栽培

近世園芸ブームを背景に、菊が上方や江戸のような大都市だけではなく、地方でも武士による菊栽培が行われていた。この中で、一つの事例として、陸奥守山藩主・松平頼寛による菊栽培を見ておきたい。

宝暦5年（1755）の刊行で、同4年（1754）の序文をもつ松平頼寛著『菊経』は、彼自らの栽培経験及び菊の性状などを漢文で記したものである。そして、これに家臣・白土盛隆が和文の解釈を入れたのが、同年出版の『菊経国字略解』である。

菊がもともと中国からの渡来植物である。中国の菊栽培書物から学んだ松平は、『菊経』の序文で、まず「吾大日本海陸懸隔數百千里節度不同、寒燠不均、其法難全用」⁴⁶と主張し、日本の風土に適する菊の栽培法の必要性を唱えた。

次に、本文の第1巻第5節の「月令」から、月ごとに菊の手入れ方法を詳しく述べた後、自分が体験した菊栽培の経験を、第2巻から第5巻まで、培養土の選択、栽培・移植方法、灌漑・施肥のやり方、病虫害の予防、種の収集、種まきなどの項目にわけて、詳細に記している。

本章の第1節で、正徳年間から、上方において菊栽培の方法を書き記した専門誌が出版されていたことを指摘した。そうした状況を踏まえれば、種から菊を育てる著者自らの経験を詳細に記してはいるが、栽培方法自体としては、ほとんど特色が認められない。しかし、彼の菊栽培そのものが、菊に含まれた中国の文化要素・知識体系に基づいて、修養を高める目的で行われている点が興味深い。

本書の特殊性について、まず特徴として挙げられるのは、引用されている数多くの中国書籍である。引用書目を見てみると、宋代の菊の専門書『菊譜』は言うまでもなく、『礼記』をはじめ、『山海経』、『抱朴子』などの神仙方術類の書物のほか、『魏史』、『唐書』などの歴史書、『楚辞』、『文選』などの文学書、さらには『本草綱目』、『農政全書』、『康熙字典』にまで、幅広く羅列している。

そして第1巻第1節「原養」では、菊を愛好する者の心得を説いている。ここでは菊をめぐる要領として、「古之養菊者能養其志、今之養菊者誇於人。養志者楽、誇於人者苦」と述べ⁴⁷、古い時代の菊を好むものは、菊の栽培を通して、人の志を養って、楽しむ。今の菊を好む者は、人にひけらかすために菊を栽培し、それがかえって自分を苦しむこととなると唱えている。つまり本書の冒頭で、松平は、まず菊栽培とは修養を積むためのものであることを明言している。

次に、平安時代から今日にいたるまで、絶えずに受け継がれてきた菊栽培の過程を認識したうえで、「愛菊之盛莫盛於今時」と記している⁴⁸。つまり正徳から始まった江戸時代の菊栽培は、今まで

46 『菊経国字略解』松平頼寛著、白土盛隆注、小川彦九郎ほか出版、1755、国会図書館蔵、函架番号111-208

47 前掲46と同じ

48 前掲46と同じ

でもっとも盛大に行われたものであることを強調している。

そして正徳から享保にかけて、京都や江戸で盛んに行われた菊の品評会については、「俗情可笑」と、名利などにあこがれるいやしい心が、くだらないものであるという認識を示している。また菊そのものについては「警勿入墮商人手、何者一經商人手、苗殖矣、価成矣、足品損一等」と述べている⁴⁹。言うまでもなく菊の品評会は、菊栽培技術の向上を促進した。しかし、そこから生まれた植木屋たちの投機的な商売によって、珍しい苗が一気に広がり、菊に仮託した中国文化に見られるような隠逸さがなくなったり、値段が高騰したりして、品格そのものが損なわれたと考えている。

前節で見てきたように、近世において、上方で菊の品評会が盛んに行われた結果、菊の栽培は、新しい苗の取引を伴う植木屋のビジネスとして成り立つようになった。また江戸民衆の娯楽の一つである菊細工も、群集を引き寄せる装置として、商売に役立っていた。しかし、江戸、大坂などの大都市で行われていた商売絡みの菊栽培とは異なり、松平ら地方武士の菊栽培が、隠逸で、君子の品格を有する菊の栽培を通して、自身の志を養うものであるとしている。こうした点に独自性を持つような菊栽培が、地方の武士によって行われていたことは極めて興味深い現象といえよう。

上方、江戸、そして地方において、性格が異なるとはいえ、いずれ高い水準の菊栽培・観賞が、近世後期には盛んに行われていた。このような庶民にまで浸透した近世日本の園芸文化について、万延元年（1860）来日したイギリス人のロバート・フォーチュンは、その著書『幕末日本探訪記—江戸と北京』で、「もしも花を愛する国民性が、人間の文化生活の高さを証明するものとするれば、日本の低い層の人々は、イギリスの同じ階級の人たちに較べると、ずっと優って見える」と述べている⁵⁰。

どの社会においても、園芸文化が最初に享受できたのは、貴族や文化人といった上流社会の人間であった。イギリスの下層階級と比べれば、日本の庶民には、花を栽培・観賞する習慣があり、彼らは非常に優れた文化と生活を享受していると、日本の園芸文化を高く評価している点は注目に値しよう。

終章 日本における菊栽培の系譜

19世紀後期の江戸は、世界屈指の園芸センターとして発展を遂げていた。先に引いたフォーチュンの『幕末日本探訪記—江戸と北京』には、江戸の染井、団子坂、浅草寺で、多くの園芸菊を買い求めて、ウォードの箱というガラス張りの箱で本国イギリスに無事送ったという話が収められている⁵¹。

イギリスにおける菊の栽培状況については、欧州の植物ハンターの研究を行った白幡洋三郎は、著書『プラントハンター：ヨーロッパの植物熱と日本』において、「園芸雑誌「ガードナーズ・クロニクル」一八六二年三月十五日号には、フォーチュンが一八六〇年秋から六一年夏にかけてイギ

49 前掲46と同じ

50 『幕末日本探訪記—江戸と北京』R. フォーチュン著、三宅馨訳、講談社、1997年、P.108

51 前掲50と同じ

リスへ送った植物が、スタンディッシュ商会で育てられている様子が報じられている。とくに十数種に及ぶ日本のキクの園芸類が、ユリやモクセイやシダと並んで言及されている」と指摘している⁵²。日本の園芸菊が、イギリスでさらなる改良が加えられた結果、欧州全土に及ぶ菊の人気を呼ぶに至ったのである。

今日、秋の風物詩として、日本各地で開催されている菊まつりが挙げられるが、19世紀後期の植物ハンターの活動によって、欧州に広げた菊が、今日でもヨーロッパで観賞されているに違いない。園芸菊は日本独特のものではなくなったが、物語や芝居の一場面を再現する菊人形は、まさに日本独特の鑑賞法であった。

生人形と菊の融合によって造られた菊人形は、嘉永年間以降に現れたものと思われるが、その前身である菊の細工物が、19世紀初期の江戸巢鴨で最初に造られたものと考えられる。自然の菊を集め、人工的に造られた菊細工で、非日常を楽しむという発想には、17世紀の近世初期、上流社会の庭園でわざと人形を置くことによって、そして造花で花見の季節を演出することによって、演劇的な遊興を楽しむ趣向を取り入れた。

江戸民衆の娯楽となった菊細工が、業種を跨いで、地域の拡大を伴って、文化年間と弘化年間に二度の流行を経験した。いずれも江戸の人々がみな集まり、こぞって見物するという賑やかで騒々しい様子であった。

こうした江戸庶民の娯楽である菊細工流行の背景には、元禄期から上方で行われてきた菊の品評会の存在が窺える。元禄から享保にかけて、京都の寺院で、大規模な菊の品評会が開催された。それを通して、菊栽培の技術が磨かれて、菊への品種改良が活発に行われたのである。

このように、もともと上流社会に握られた園芸文化が、庶民へと広がりを見せていく過程において、京都の寺院が民衆の集まる空間として、利用されていた。つまり園芸文化の伝統をひく上方において、寺院が一つの仲介として、民衆に愛好された菊栽培の技術向上を促進し、園芸菊ブームを高めた役割を果たしたと思われる。

一方、新生都市である江戸において、園芸知識を庶民に広げ、また全国にある珍しい植物が江戸にもたされた点においては、徳川幕府をはじめとする武家が媒介として、江戸園芸文化の開花に役割を果たしたと考えられる。

さらに、地方の武士による菊栽培が、隠逸の文化人に愛好され、高德の君子に比類された中国文化の要素に基く菊観念を背景として行われていた。自身の修養を積む活動の一環という特徴がみられ、江戸や大坂などの消費大都市で行われた商売絡みとは異なる菊栽培も存在したのである。

幕藩体制のもとで、経済が繁栄し、社会も安定を呈した。このような社会情勢を背景に19世紀日本の園芸文化が一気に開花したと考えられる。菊も園芸植物として著しい発展を遂げたが、日本における菊栽培の歴史には、中国から伝来し9世紀初頭から貴族によって始められたという極めて長い伝統があった。

52 『プラントハンター：ヨーロッパの植物熱と日本』白幡洋三郎著、講談社、1994年、P.237

また貴族のほかに、寺院でも菊が栽培されていた。こうした伝統が、近世に入ると民衆へと広がりを見せた。庶民に支えられた園芸ブームの中で、菊は著しい品種改良を遂げ、菊人形という日本独自の鑑賞法が考案されたのである。そして19世紀半ばには、日本を訪れた欧州の植物ハンターによって、さらに菊は世界に広がりを見せるところとなったのである。

参考文献

- 朝日新聞社『朝日百科 世界の植物 1』, 朝日新聞社, 1978年
井上光貞ほか編『律令国家の展開』, 山川出版社, 1995年
江馬務著『江馬務著作集第5巻: 食事と住居』, 中央公論社, 1988年
王敏『花が語る中国の心: 美女・美酒・美食の饗宴』, 中央公論社, 1998年
小笠原亮『江戸の花競べ: 園芸文化の到来』, 青幻社, 2008年
川上貢『新訂日本中世住宅の研究』, 中央公論美術出版, 2002年
川尻秋生『日本の歴史 揺れ動く貴族社会』, 小学館, 2008年
斎藤正二『日本人とサクラ: 新しい自然美を求めて』, 講談社, 1980年
斎藤正二『植物と日本文化』, 八坂書房, 2002年
白幡洋三郎『プラントハンター: ヨーロッパの植物熱と日本』, 講談社, 2005年
白幡洋三郎『花見と桜: 日本的なるもの再考』, PHP研究所, 2000年
白幡洋三郎ほか編『都市歴史博覧: 都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ』, 笠間書院, 2011年
原田信男『江戸の料理史』, 中公新書, 1989年
平野恵『十九世紀日本の園芸文化: 江戸と東京, 植木屋の周辺』, 思文閣, 2006年
文京ふるさと歴史館編, 『菊人形今昔: 団子坂に花開いた秋の風物詩』, 文京区教育委員会, 2003年
山田孝雄『櫻史』講談社学術文庫, 1990年